

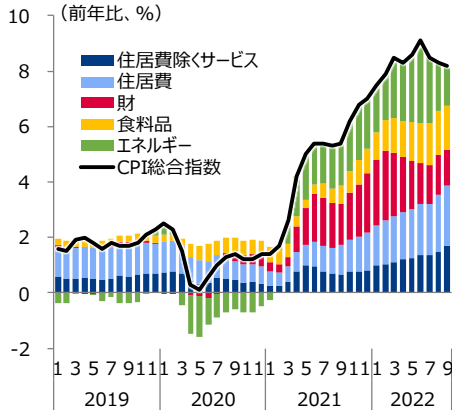
米国

消費者物価指数（2022年9月）

市場予想を上回る物価上昇がFRBや政権にとって重石に

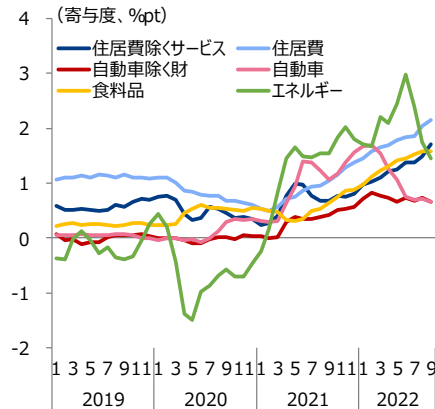
政策・経済センター
田中嵩大
03-6858-2717

1 消費者物価（総合）



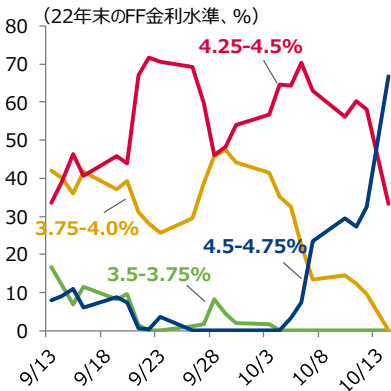
出所：米国労働省より三菱総合研究所作成

2 項目別の総合CPIへの寄与度



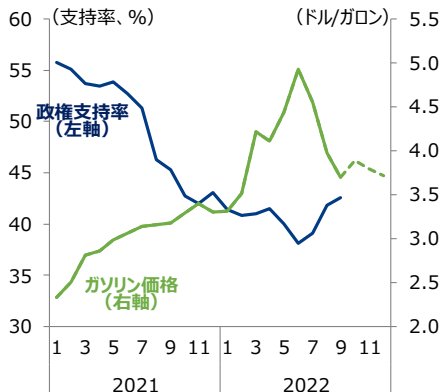
出所：米国労働省より三菱総合研究所作成

3 市場の政策金利予想（22年末）



注：直近は10月14日。
出所：Fed watchより三菱総合研究所作成

4 政権支持率とガソリン価格



注：月次平均。10月以降のガソリン価格はEIA見通し。
出所：EIA、Bloombergより三菱総合研究所作成

評価ポイント

今回の結果

- 9月の消費者物価指数（CPI）は前年比+8.2%と、前月（同+8.3%）から3カ月連続で伸びが鈍化した（図表1）、市場予想（同+8.1%）を上回った。また、コアCPIは同+6.6%と前月（同+6.3%）から伸びが加速した。
- 品目別の物価上昇率を見ると、エネルギー（前月比▲2.1%）が3カ月連続で下落し、総合CPIの伸びを抑制した。一方で、食料品や住居費、サービスなどが押し上げ寄与となった（図表2）。

基調判断と今後の流れ

- 今回、米国のインフレ圧力が根強いことが再確認される結果となった。エネルギー価格の下落を背景に、総合CPIは3カ月連続での伸び鈍化となったが、コアCPIの伸びは加速している。
- 先行きも、高インフレは長期化しよう。FRBによる大幅利上げにも関わらず、労働市場は逼迫、高い賃金上昇が続いており、サービス価格は上昇が予想される。また、住宅需要の減少に伴い、足元では住宅価格が下落しているものの、CPIに反映されるには数カ月のラグがあるとされる。ウエイトの3割を占める住居費の高止まりはCPIの低下を妨げよう。
- さらに、OPECプラスが11月からの原油大幅減産を決定したことも懸念事項だ。既にWTI価格は9月下旬を底に再び上昇しており、米エネルギー省の見通しでは、ガソリン価格は冬にかけて高止まりする見通しだ。
- 今回の結果を受けて、11,12月のFOMCでそれぞれ0.75%ptずつの利上げを行うとの見方が高まっている（図表3）。その場合、年末時点のFF金利の誘導水準は4.5-4.75%となり、FOMC参加者の見通し中央値（4.4%）を上回る。23年の米国経済の押し下げ幅がさらに大きくなる懸念される。
- また、今回が中間選挙前最後のCPI公表であったことから、バイデン政権にとっても厳しい結果だと言えよう。9月まではガソリン価格の下落が支持率回復の一因となっていたと指摘されている（図表4）が、CPIの高止まりやガソリン価格の再度上昇は、民主党に苦戦を強いる要因となるだろう。